

## これまでの経験を活かして

### 「福祉の視点」でまちの復旧復興をサポート

一般社団法人ウエルビーデザイン  
理事長

メディア・リレーションマネージャー 篠原辰二さん

西村勇太さん

——一般社団法人ウエルビーデザインについて教えてください。

篠原 当法人は地域福祉の推進を図ることを目的として、様々な事業を展開しています。



篠原 辰二さん

私は当法人の理事長として現在活動していますが、これまで紋別市と新ひだか町で社会福祉協議会（社協）に14年間勤務してきました。社協の役割は地域の人々が住み慣れた町で安心して生活することができる「福祉のまちづくり」の実現です。東日本大震災を契機に地域コミュニティが重視される中で「市町村の垣根を越えた広域なコミュニティが必要なのではないか」と考えるようになりました。支援対象を日本全体

に広げることを目的に、平成24（2012）年に「一般社団法人ウエルビーデザイン」を設立。社会福祉分野でのコンサルティングや企画調査、研修講座の開催などの事業を行っています。災害復興支援事業はその中の一つとして位置づけています。

近年、大きな地震や水害が続発したことで災害からの復旧復興の大変さが知られるようになってきましたが、インフラの確保や備蓄品の調達など「モノ」に焦点が当てられることが多く、被災者のメンタルやヘルスケアなど「福祉の視点」での取り組みは不十分であると感じていました。それならば「自分たちでサポートできる体制を整えよう」と考え、災害復興支援を事業に取り入れました。

——どのような経緯でむかわ町を支援したのですか？

西村 厚真町の被害状況は連日報道されていましたが、むかわ町はメディアで触れられることが少ないため、支援の必要性が知られていないという課題を抱えています。むかわ町はSNSを使った災害状況の発信やボランティア募集を行っており、それがマンパワー不足に拍車をかけていることに気づきました。



西村 勇太さん

一方、私たちは平成28（2016）年の台風10号による南富良野町の水害への対応で情報発信を支援した経緯から、フェイスブック上に「北海道災害情報共有サイト」を立ち上げていました。

——情報発信以外にも様々な取り組みを行っていますね。

自治体がSNSなどに情報を発信することで得られるメリットがある一方で、手間がかかる、ダイレクトにクレームを受けるなど、デメリットも少なくありません。むかわ町に「私たちが入ることで町の負担が軽減できる」とお伝えし、ボランティアとして担当させていただきました。



足湯とマッサージのサービスを受ける被災者  
〔一般社団法人ウエルビーデザイン提供〕

篠原 まず「情報共有会議」の運営支援があります。平成28（2016）年に大水災害のあった南富良野町では役場、社協、外部支援者で「情報共有会議」を行いました。支援終了後も、次の災害に備えてNPOなど外部支援者が長期的に被災地で活動できる環境整備をNPO法人北海道NPOサポートセンターなどと共に2年かけて構築しました。この経験から、胆振東部地震でもNPOサポートセンターが開催する「情報共有会議」の運営支援を行いました。地震発生1週間後で会議を開催し、迅速な対応をすることができました。これまでは自治体や社会福祉協議会が主体となり、外部支援者がそこに招かれる形でしたが、胆振東部地震では外部支援者主導で会議を開催できたことは大きな進歩です。

像が見えなくなる。そこで13団体からなる「北海道足湯隊」を結成し、そのマネジメントを担当させていただきました。足湯は、お湯に足を浸けてもらい、手をもみほぐす活動ですが、自然と震災当時の恐怖や生活の不安、身体や健康に関する「つぶやき」など気持ちを吐露していただける機会になっています。「つぶやき」からは被災者に対する支援の視点が見えてきますし、長期的に関わることで被災者のメンタルや環境の変化が見えてきます。これらの「つぶやき」は実際に支援をするうえでとても大事なものでした。

——思い出の品の修復も行っているそうですね。

西村 厚真町では被災者のアルバムのほか、眼鏡や鞆、時計の修復を行っており、むかわ町では図書館の資料の修復をボランティアとして行いました。アルバムの写真をデータにしてお返しするサービスを行っています。全国でも数少ない取り組みです。写真についた汚れを落とす人、写真をデータ化する人、それを修正してきれいに復元する人など、たくさんのボランティア

によって、思い出の品が鮮やかによみがえりました。

平成31(2019)年3月から始まった「むかわ町復興支援訪問プロジェクト」について教えてください。

西村 震災から2〜3カ月が過ぎた頃、保健師さんから「仮設住宅に入居している

方、福祉サービスを受けている高齢者の状況は把握できるが、在宅の方、サービスを受けていない中高年の方の状況が把握できていない」という話を聞きました。その頃、私たちは広島県を拠点とする「NPO法人ピースウィングス・ジャパン」と契約し、テレビなどの生活必需家電を被災者住宅に届ける支援を行っていました。設置や

利用状況を確認するために様々な被災者宅を訪問しますが、その時の経験から、私たちも町民の状況を広く把握する必要性を痛感していたのです。その思いを持ってむかわ町に全戸訪問を提案したところ快諾していただき、このプロジェクトの実施が決定しました。

町内全4,200世帯の現状把握に向けて、むかわ町、むかわ町社協、当法人の三者で「むかわ町復興支援訪問プロジェクト」を組織し、協力いただけるボランティアを募集し、全戸訪問を進めました。

平成31(2019)年3月末でのむかわ町災害ボランティアセンターの閉鎖が決定していたので、マンパワーが確保されているうちに、3月17日に穂別地区から調査を開始しました。調査が始まってからは、調査票の作成、ボランティアさんのコーディネートやレクチャー、訪問する地域のマップ作成、収集した情報の整理、データ入力など、やらなくてはならないことが山積みでした。

——どのような方がボランティアとして参加されていましたか？

篠原 様々な方にご協力いただきました。

訪問活動が始める前に札幌市内で「むかわ町の現状報告と支援活動参加のお願い」をNPO法人北海道NPOサポートセンターと共に開催しましたが、これに共感いただいた保険会社が社内でボランティアを募って参加してくれました。コミュニケーションに長けており、聞き取りもスムーズで助かりました。一般のボランティアさんや専門職など、44日間で延べ520人もの方々にご協力いただいております。

——訪問を通じてどのようなことがわかりましたか？

西村 事前に町や自治会を通して全戸訪問が行われることを周知してもらいましたが、アポイントメントは取っていません。不在のお宅もあり、再訪問しなくてはならないこともありましたが、都市部と違って地域コミュニティがしっかりしているためでしょう、訪問活動はスムーズでした。最終的に町内全4,200世帯中7割もの状況が確認できました。

ご自宅にうかがい、精神的な支援が必要な状況が見られた場合は、保健師さんに報告して訪問してもらい、り災証明や義援金

の申請に不備があった場合には、むかわ町役場に報告するなど、すぐに課題対応を行いました。

篠原 精神的に不安を抱えており、精神科医や臨床心理士の関与が必要な方はまだ多く見受けられます。地震がトラウマ(心的外傷)となり、明かりを点けたままでない怖くて眠れないという方も、高齢者だけではなく子どもにも多いと聞いています。これらの訪問で明らかになった現状が、町で行う被災者への心のケアなどに活用されていくことと思います。保健師さんが把握している健康に関する情報とセットにして活用されるようになれば嬉しいですね。

——最後に胆振東部地震支援で感じた課題と今後に向けて準備すべきことを教えてください。

篠原 被災自治体は様々な寄付金、支援金が寄せられています。3町間に支援格差が生じていることが残念でした。限られた財源の中で復興しなくてはならず、被災された方すべてに支援がしっかりと行き渡るわけではありません。今回は多くの団体が支援に入りましたが、支援方法の共有や

～町内全4,000戸の現状把握に向けた～  
**むかわ町復興支援訪問プロジェクト**



住民の“今”を見つめ  
必要な支援につなげる

**8/23～26 強化週間 訪問ボランティア募集**  
※18歳以上のボランティア保険加入者であれば資格や経験は問いません。

お問い合わせ先  
①活動内容に関するお問い合わせ  
→むかわ町社会福祉協議会  
0145-42-2467  
②参加方法に関するお問い合わせ  
→一般社団法人ウェルビーデザイン  
info@wellbedesign.jp

エントリー方法  
活動詳細は次頁へ

ウェルビー デザイン  
一般社団法人 Wellbe Design  
〒004-0022札幌市厚別区厚別南2丁目7番28号  
TEL: 011-801-7450 (代表) http://www.wellbedesign.jp

訪問ボランティア募集のWeb サイト



穂別図書館の再開に向けて復旧作業を行ったボランティアの皆さん  
[むかわ町災害ボランティアセンター提供]